

令和6年度
金沢大学ステークホルダー協議会
実施報告書

令和7年1月
国立大学法人金沢大学

概 要

日 時：令和6年11月1日（金） 14:00～17:15

会 場：金沢大学自然科学系図書館G1階〔石川県金沢市角間町〕

全体会・まとめ：AVホール,

分科会：グループスタジオ各室

プログラム：

- 14:00 開会
- 14:03 学長挨拶・近況報告
- 14:45 分科会
- 16:15 分科会報告・全体意見交換
- 17:15 閉会



開会のあいさつをする和田学長

参加者数：98名

【内訳】（ ）はオンライン参加者で内数

学外：38名（9名）

自治体7名（5名），企業13名（2名）

高校関係者9名（2名），地域8名（1名），

経営協議会委員1名（1名），学友会2名，

元職員1名，学生の父母等1名，

報道機関1名，その他1名（1名）

学内：28名（3名）

学生4名

教職員24名（3名）

（うち会場事務スタッフ17名）

学内列席者：32名（2名）



あいさつをする安宅建樹 学友会会長



閉会のあいさつをする森本理事

ステークホルダーのご意見

分科会

今年度は、ステークホルダーの皆様からより多くのご意見をいただけるよう、分科会の時間を15分長く設定しました。参加者は6つのテーブルに分かれ、本学教職員とステークホルダーの皆様による「オール金沢大学」で意見交換を行いました。

■ Aグループ ■

テーマ：金沢大学における正課を活用したリスクリング教育

ファシリテーター：猪熊孝夫 学長補佐，柿川真紀子 学長補佐

ステークホルダー：自治体1，企業2，地域2，学友会1，その他1

以下の3点を中心に、本学のリスクリング教育について説明があり、その後意見交換を行った。

- ① 金沢大学における正課の授業を活用したリスクリングプログラムの概要
- ② 現在本学で提供されているリスクリングプログラムの種類
- ③ リスクリングプログラムの受講形態・授業料等



【意見交換】

1. リスクリング教育の現状

- ・日本では、リスクリング教育が十分に普及していない。
- ・個人の目線では、給与等の報酬との連動がないと、受講自体のモチベーションが湧かない傾向にある。また、プログラムを提供する企業・大学等にブランド力があり、それ自身が受講者自身のブランディングにつながるようなメリットがあるかも重要視される。
- ・企業の目線では、業績に結びつかないと社員の教育に一生懸命にならない。その点で、リスクリングプログラムの提供者は、企業に対して、業績にどのような良い影響が出るのかを示すことが求められる。
- ・新しい事業を始める際は、社内にはない技術を身に付ける必要が出てくる。その場合には、社外に学びに行く必要が出てくるため、学びの場が身近にあると足を運びやすい。

2. 大学がリスクリング教育を提供する意義

- ・大学の科目を受講すると、周囲からは「しっかりと学んだ」という印象を受ける。
- ・企業では、オンザジョブトレーニング（OJT）を中心とした人材育成が行われるが、時間面でも費用面でも負担が大きい。その人材育成を大学が担うことに非常に意義がある。
- ・企業は、自身の企業でこそ真価を発揮するような技能の修得に投資をする。一方で、基礎的な技術・技能・スキル（ジェネリックスキル）の修得には積極的ではない傾向にある。

そのため、大学で企業にとって新規事業や業績に結びつく部分を学ぶことができると、企業ニーズに合致する。

3. リスキングプログラムのパッケージ化

- ・ Web サイト等で情報を取得する受講希望者にとっては、各プログラムのレベルや取得できるスキル等の程度が把握できると良い。
- ・ 例えば、該当プログラムが「初級者コース／初級コース後に受講すべきコース」や「TOEIC 何点を基準としたコース」などの情報が一目で分かると、受講希望者のニーズとのすり合わせが可能になる。
- ・ リスキングプログラムがある程度パッケージ化されていると、受講希望者にとって分かりやすく、手が出しやすい。科目等履修生の場合は、一つ一つのプログラムを自分で選ぶ必要があるため、パッケージ化のメリットは大きい。

4. 大学院の授業科目の拡充

- ・ 学部レベルの知識等では、企業内に同等のレベルの社員が多く存在する。個人としてより高いレベルを目指すには、大学院課程程度のリスキングができることにメリットを感じる。
- ・ ただし、専門性が高くなりすぎると、学びの範囲が非常に狭くなるため、ある程度の調整は必要になる。

5. その他

- ・ 授業科目を、個人単位ではなく、例えば企業単位で受講できるシステムがあると良い。例えば、6 単位のプログラムに対して、6 単位を分割し、それぞれ別の社員に受講させるような形式があると、企業としては社員を送り出しやすい。

■ Bグループ ■

テーマ：大学の防災・復興支援活動と教育

ファシリテーター：佐川哲也 学長補佐, 本所恵 学長補佐

ステークホルダー：自治体 1, 企業 2, 地域 1, 高校関係者 4, 学生の父母等 1, 教職員 1

以下の5点を中心に、本学の防災・復興支援活動と教育への取り組みについて説明があり、その後意見交換を行った。

- ① 能登半島地震に対する学生の震災ボランティア実施状況の共有
- ② 金沢大学ボランティアさぽーとステーション（ボラさぽ）の活動実績
- ③ 二次避難した生徒への支援実績
- ④ 能登半島地震に対する学生の震災ボランティアを継続するための環境整備
- ⑤ 震災研究を踏まえた防災・復興学修プログラムの新構築
- ⑥ 本学における防災・復興支援活動成果の他大学への共有

【意見交換】

1. 学生ボランティア

- ・金沢大学には、令和6年能登半島地震の前から、ボランティア活動に取り組む学生団体「金沢大学ボランティアさぼーとステーション（ボラさぼ）」がある。
- ・令和6年能登半島地震発生後、「ボラさぼ」は、県内各地でボランティア活動を行っている。2月下旬頃の1.5次避難所での支援にはじまり、その後も石川県と連携しながら、現在もボランティアの活動は続いている。
- ・1月、2月の段階では、現地の道路やボランティア受け入れ体制がまだ整っていなかったことから、学生に対し、ボランティアに行くための心構え、安全対策、保健管理に関する研修を行った。
- ・学校教育学類の学生も、奥能登の中学生の支援にあたった。活動にあたっては、現地の子どもたちが傷つかないように、十分に配慮しながらコミュニケーションを図った。



2. ボランティアに参加した学生のメンタルケア

- ・ボランティア中は、担当教員が定期的に巡回するなど、学生の様子に気を配っていた。また、ボランティアの前後も、大学のシステムを介して、いつでも相談に応じることができるようにしている。
- ・ボランティアに参加する際には、研修等を通してボランティア活動で何が起こるかをあらかじめ学んでおくこと、活動後の振り返りを行うこと、学生自身の家族に報告を欠かさないことなどが大切である。
- ・本学の学生の活動では、活動前の研修や活動後のフィードバックはもちろん、教員が活動をバックアップしている。過去には、学生がボランティア活動を通してショックを受けるというケースが多々あった経験から、教員による学生のボランティア活動への帯同や相談の受付など、学生への支援体制を整えている。

3. 本学の「防災・復興人材特別プログラム」

- ・本プログラムの開設により、防災士の資格取得者数の増加が見込まれる。
- ・地域の基幹大学として、地域のニーズに応えた人材を輩出していくことが求められる。
- ・震災を経験した大学として、その経験を踏まえた教育・研究を提供できる機会をつくることが重要であり、大いに期待をしている。

4. その他

- ・現場のニーズは日々変わっている。ボランティア活動にあたっては、現地の人々や他のボランティア参加者と情報共有しながら、現場の状況に応じることが大切。
- ・ボランティアの現地での経験を、大学のプログラムに生かし、そのプログラムで学びを深め、あらためてボランティアに出かけるような、好循環な取り組みを継続していく。

■ Cグループ ■

テーマ：産学連携における現状と未来への取り組み

ファシリテーター：坂本二郎 学長補佐, 長谷川浩 学長補佐

ステークホルダー：自治体 1, 高校関係者 1, 企業 3, 経営協議会委員 1, 地域 1



金沢大学では世界トップレベルの研究展開と拠点形成を通して、社会との共創や研究成果の社会実装などによる社会貢献を目指している。

本分科会では、まず本学の産学連携活動の現状について説明があり、その後、金沢大学が大型共同研究を一層推進するための課題などに焦点をあて、意見交換を行った。

【意見交換】

1. 産学連携の現状

- ・金沢大学としては、企業・自治体との共同研究・受託研究の実施件数及び受入額を伸ばしていきたい。
- ・全国的には、3,000万円を超える大型の産学連携研究が増えている傾向にあり、金沢大学としても追従していきたい。

2. 共同研究を行う企業とのマッチング機会の創出

- ・企業側としては、教員が現在、何に興味・関心を持っているのかをインターネットだけで把握することは難しい。また、研究に関する具体的な情報の収集も限界がある。企業として製品開発等につながる、大学が行っている飛躍的な研究について知る機会がもっとあると良い。
- ・企業担当者が大学に訪問する際、どこで情報が得られ、相談できるのかが知りたい。気軽に訪問し、研究シーズについて聞けるような体制があると良い。

→先端科学・社会共創推進機構にURA（ユニバーシティ・リサーチ・アドミニストレーター：研究活動の活性化や研究開発マネジメントの強化をサポートする専門人材）を配置している。ぜひお話を聞かせてほしい。

→現在建設中の未来知実証センターでは、本学の研究に関する展示スペースや、研究者と直接相談できるブースなどを設置する予定である。

- ・大学と企業のシーズ・ニーズをマッチングする機会が増えると良い。企業としては、大学の研究に関する情報が幅広く収集でき、参加者同士の出会いの場となりうる学会やマッチングイベントの存在はありがたい。
- ・大学と連携することのメリット、例えば、どのような価値を市場に提供すれば、将来的な利益につながるかが明らかになると、共同研究に積極的になる企業が増えるように感じる。
- ・マッチングの機会を増やすことも大切だが、取り組む研究の内容を検討することも大切。

例えば、大学が社会のニーズに応える研究に積極的に取り組めば、それに賛同する企業や自治体が自然と集まる。

- ・社会に役立つ研究課題等をインデックス化して、学外にうまく周知してほしい。
- ・企業側の研究シーズに関する情報を集め、大学へ提供する仕組みを利用して、産学をマッチングするシステム開発を行っている会社もある。

3. 金沢大学の産学連携システムの再構築

- ・産学連携のシステムが強固に作られていることが、ボトルネックになっている可能性もある。特に共同研究講座（大型の共同研究を行うための仕組み）は厳しい基準で作られているので、ユーザーが使いやすい、柔軟性のあるシステムにできるとよい。他のどの地域でもなく、「金沢」の地で共同研究をする魅力を発信してほしい。
- 現行の「金沢大学共同研究講座及び共同研究部門規程」には、企業の開発トップ人材の常勤を求める規定があり、見直しを検討すべきである。また、本学の特色と強みを反映させた制度設計を推進したいと考えている。
- ・いきなり大型の共同研究を始めるより、小さなアドバイスレベルの話から少額の共同研究を始めて、大きな研究に発展させていく方法もある。
 - ・企業側としては、大学としての知的財産権の所在に関する考え方を事前に明確に示してもらえると安心できる。

■ Dグループ ■

テーマ：総合知・未来知による社会変革・社会貢献を加速する取り組み

ファシリテーター：後藤典子 学長補佐, 吉村優子 学長補佐

ステークホルダー：高校関係者 2, 企業 2, 地域 1, 教職員 1

以下の3点を中心に、本学の社会変革や社会貢献を加速するための取り組みについて説明があり、その後意見交換を行った。

- ①地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J-PEAKS）の概要
- ②未来知実証センターについて
- ③新学術創成研究機構、子どものこころの発達研究センターの研究紹介



【意見交換】

1. 研究の事業化および社会実装化へ向けた展望

- ・金沢大学では、事業化を目指す研究もあれば、現場のニーズを拾い、その課題の解決や社会実装を目標にしている研究もある。

＜事業化を目指す研究の具体例＞

乳がんの再発転移を予防する基礎研究を行い、将来的に新薬の開発を目指す。

<現場の課題解決や社会実装を目標にしている研究の具体例>

教育現場の声を集め、科学的根拠に基づいた教育を構築する。

- ・大学には、誰も気が付いていない重要なシーズが眠っている。金沢大学では、J-PEAKS 事業を通して、文理医が融合する学際的研究を推進していきたい。

2. 社会に求められる人材の輩出

- ・現在、企業はファシリテーション能力やチームビルディング能力、プロジェクトマネジメント能力を持つ人材を即戦力として求めている。
- ・イノベーションを起こす時は、多種多様な要素をまとめ上げる力が必要である。金沢大学では、研究者間の調整や、研究費の申請、共同研究の計画など、研究支援を専門に行うURAが重要であると考え、今年から本学の、大学院生を対象に、URA インターンシップを開始した。
- ・最近では非認知能力（やる気、忍耐力および協調性など、知能検査や学力検査では測定できない、目に見えない人の心や、社会性に関係する能力）の重要性が注目されている。大学へ送り出す前の高等学校段階から育てていく必要がある。
- ・高等教育機関として深い専門的な知識を持つ人材を教育することは必要だが、学問領域にとらわれない広い視野をもって研究ができる人材を育てることが重要である。
- ・金沢大学がスタートアップ・アントレプレナーシップ教育の受け皿になれるように、広い視野を持った人材を育てるため、所属の専門科目だけでなく、興味のある分野を横串で学ぶことができるカリキュラムを日々思案している。

3. その他

- ・日本は理学的・医学的な課題を見つけ、突き詰めていくことが得意だが、社会問題を自分事として捉えて課題探究できる、国際的な視野を持つ人材育成をすることも重要である。
- ・金沢大学には地域の課題について研究し、解決方法を模索する地域創造学類がある。ここでの学びを通して、日本だけでなく、世界中で様々な問題が起きていることを肌身で感じられる人材を輩出できればと考えている。

■ Eグループ ■

テーマ：「地域をつなぐ大学の役割：能登復興を起点とした未来社会の創造」

ファシリテーター：篠田 隆行 学長補佐, 佐藤 智哉 准教授

ステークホルダー：企業 2, 地域 2, 教職員 OB 1, 教職員 1

金沢大学未来ビジョン「志」では、「社会との和の創造と深化」を掲げ、金沢大学が社会との共創による研究の展開や人材育成、ならびに社会への還元をしていくことを推進している。

また、令和6年1月1日に発生した令和6年能登半島地震からの復興支援に関しては、能登里山里海未来創造センターを中心に全学一丸となった体制で取り組んでいる。

本分科会では、未来社会を構築するための地域における大学の役割に焦点をあて意見交換を行った。

- ① 令和6年能登半島地震からの復興に向けた大学としての役割
- ② 地域住民がその地域に限定することなく国際性を有するために、例えばインバウンド観光を基軸とした国際化において大学が果たせる役割
- ③ 能登復興の姿をモデルとして、人生100年時代における新たな未来社会を創造するための大学の役割

【意見交換】

1. 能登半島地震からの復興に向けた大学としての役割

- ・大学全体として、能登の創造的復興にどう寄与できるか考えてほしい。
- ・この震災が起きる前から大学が行っていた、様々な研究の実績、既に持っているポテンシャルをもう一度復活させ、復興につなげてほしい。
- ・大学生のみならず、小・中学生の活躍の場を大学が創出して後押ししてほしい。
- ・総合大学としていろいろな分野をバックボーンとして持っているので、横串を刺して総合的な視点、俯瞰的な視点での創造的復興プランを実際に復興につなげられるよう、中長期的な支援を行っていくことが重要である。加えて国や県単位での物理的・金銭的な支援もお願いしたい。
- ・本学の地域創造学類に、能登を新たに創造してほしい。



2. 国際性という観点で、地域と国際をどうつないでいくか

- ・復興応援ツアーとして、留学生がアテンドして外国人観光客を能登へ案内するなど、日本人学生とも連携し、質の高い観光につながるような事業に発展させたい。
- ・地震を経験したことがない留学生もいるので、例えば地域の方が留学生と一緒に、防災に関するマニュアルを英語で作成して地域で共有するなど、金沢大学の国際性がその地域の復興支援に寄与できることがあるのではないかと。

3. 人生100年時代における新たな未来社会を創造するために大学に期待すること

- ・総合知・未来知を活用して、地域の復興に貢献することが求められていると思う。
- ・北陸未来共創フォーラムの8つの分科会が横のつながりを持ち、もっと異分野交流ができる仕組みをつくる必要がある。
- ・角間キャンパス周辺、杜の里周辺に住んでいる地域住民の方と、もっと密接な関係が築ける枠組みがあるといいと思う。
- ・大学として、学生や大学関係者が地域住民の方と一緒に、ざっくばらんに話せる「雑談のチカラ」を定期的に企画していきたい。

■ Fグループ ■

テーマ：「ダイバーシティ研究環境：理想のキャンパス」

ファシリテーター：長谷部 徳子 副学長，安部 聡一郎 学長補佐

ステークホルダー：企業 1，自治体 2，高校関係者 2，教職員 4，学生 3

ダイバーシティ研究環境：理想のキャンパスはどのようなものかをテーマとして，大学から

①から④について取り組み等を説明後，種々意見交換が行われた。

- ①フェムテック事業
- ②トイレの改修クラウドファンディング
- ③子どもを連れてこられるキャンパス/
親子に優しいキャンパス
- ④感覚の多様性に対する環境整備



【意見交換】

1. フェムテック事業

- ・女子の中学・高校生のフェムテック教育に関してどう取り組むかが課題であるが，高校生向けのフェムテック事業（性教育）で連携していけたらよい。
- ・KUGS 高大接続プログラムでは，「大学での学び」個別プログラムとして，オンラインのセミナーやラウンドテーブルが提供されているので，活用していけたらよい。
- ・大学生が主導することによって性についての話題を出しやすい雰囲気づくりができ，教育効果も期待できる。そういう機会・場を是非提供していただきたい。

2. クラウドファンディング（CF）

- ・クラウドファンディングは，元々は科学技術に対する先行投資ということが視点であり，夢のある技術の進歩などを組み込めると良い。例えばトイレの改修であれば，排泄の際に健康状態がわかる仕組みや体調管理に繋がるものを盛り込めば，ただの改修ではなくなる。
- ・医療的ケア児の保育など，医療との組み合わせも考えられる。
- ・金沢大学におけるダイバーシティ推進の取り組みの見える化に活用してはどうか。

3. 子ども（家族）に開かれたキャンパス

- ・キャンパスに親子がいても良いと思う。
- ・アメリカのコロラド大学ではキャンパス内に研究施設として保育所が存在し，学生の実習の場にもなっている。
- ・安心して子育てできるというのは，大学教職員の研究環境向上を図る上でも重要。
- ・学内に，男性で育休を取った方たちのコミュニケーションの場があればよいと思う。子育て中の男性のネットワーク形成にも取り組んでほしい。
- ・学内に子の一時預かりできる場所があると，男性も育児（育休）しやすく，子供を育てやすい環境になる。遊ぶ場だけでもあると助かる。
- ・ベビーシッター制度は，家に他人を上げるのにちょっと抵抗がある。学内に，シッター制度を利用して子を預けられる場所ができればよい。

- ・保育園の中のダイバーシティの問題もあるのではないかと。外国人スタッフの子の受入ができることも必要。
- ・子を預けるスペースかつ子どもにわかりやすく研究を発信できるようなスペースとして、学内の空きスペースを活用できないか。
- ・学生が実習で使えるような場所にするとか、教育や研究に結びつけたプロジェクトをやってみてはどうか。
- ・利用する方々の多様性を考えると、子育て世代に限定してサポートを考えることが妥当なのか。
- ・ダイバーシティはもう当たり前存在するもので、それを踏まえたうえで考えていくもの。
- ・「しなければならないこと」は経費として取り組むべきで、「あったらいい・した方がいい」は必要経費ではないと思う。(その線引きは難しい)
- ・金沢大学のダイバーシティ推進はまだ不十分で「しなければならない」こと。研究だけでなく教育に関しても進めていかなければいけないと考えている。

4. 感覚の多様性

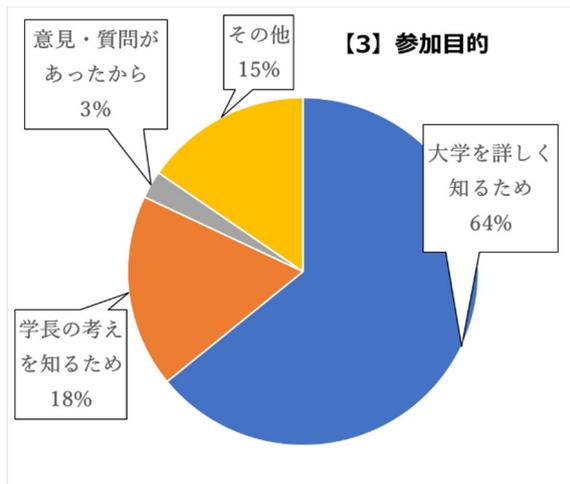
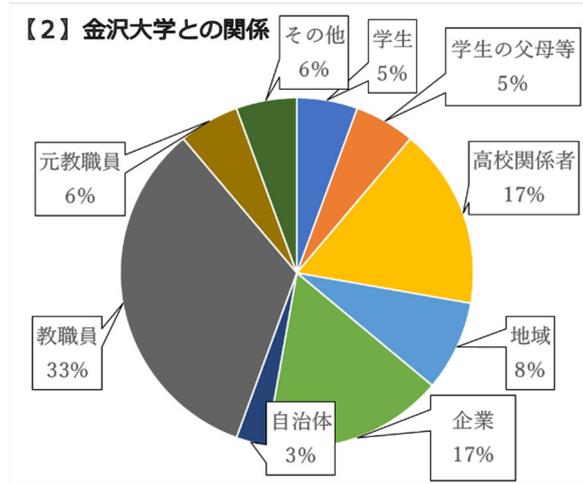
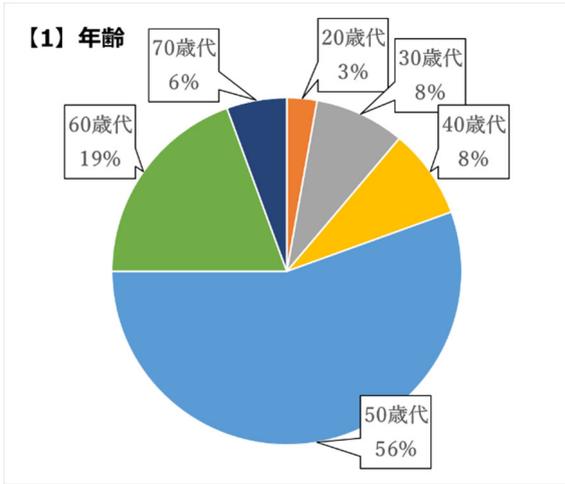
- ・ダイバーシティ推進をアピールするレインボーなどの可視化は、圧迫感を感じる方もいるので、感覚の多様性に関して留意して行うべきである。
- ・フェムテック事業に関連し、トイレの個室に付けたモニターに人が映ると抵抗感がある。

5. その他

- ・金沢大学のダイバーシティの取り組みは女性を重視しすぎていると思う。
- ・ダイバーシティ推進機構は、女性を増やすことだけでなく、障害者の方、外国人の方など全ての方が過ごしやすい環境作りに取り組んでいる。
- ・海外の大学ではダイバーシティのための拠点をもつところがある。見える化・アピールできる場所を考えていきたい。
- ・キャンパスに子どもを連れてくることは問題なく、かつ研究教育に資することができたらよいと思う。

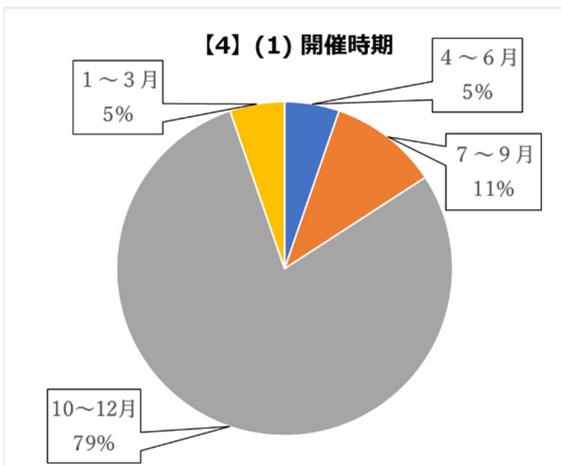
アンケート結果

回収件数〔回収率〕：36件〔73%〕



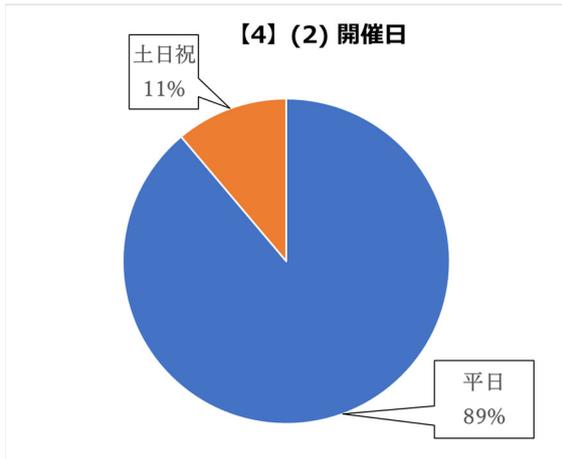
【3】その他御意見

- ・ どのようなお考えをお持ちの方がステークホルダーにいらっしゃるのか知識を得るため。
- ・ 防災を、どうとらえていくのか。



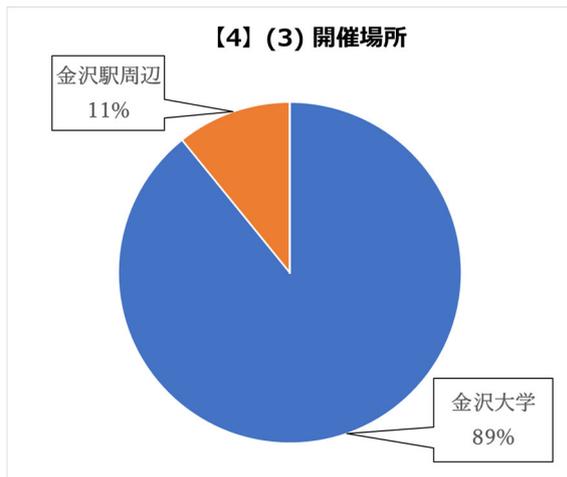
【4】(1) その他御意見

- ・ 1月~3月は気候的に難しいと思う。
- ・ 特に時期的な良し悪しはないですが予算時期は厳しい。



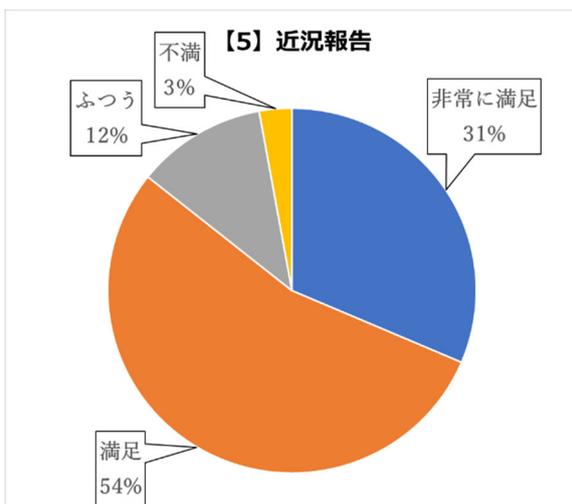
【4】(2) その他御意見

- ・平日だと授業のない日しかできないと思う。
- ・17時までに終了するとよい。
- ・働き方改革の中で平日のほうがbetterだがイベント類は休日でもOK。



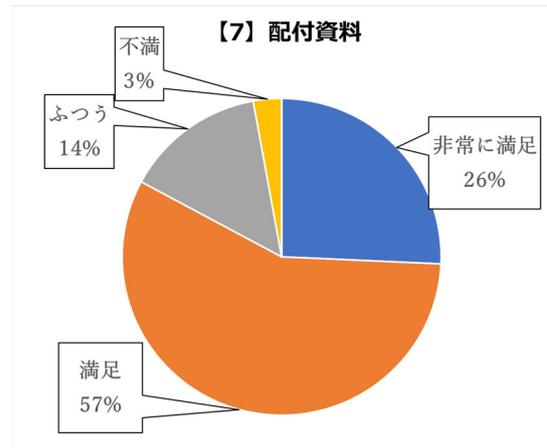
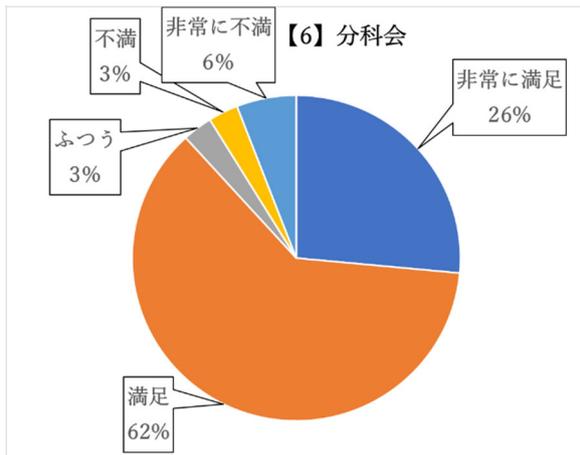
【4】(3) その他御意見

- ・ホームカミングと兼ねられないか。
- ・駅周辺が参加しやすいが、キャンパスでもOK。



【5】その他御意見

- ・金沢大学の動向を大きな視点から知ることができて良かった。
- ・貴学の現状と課題、成果などを詳しく知ることができ、有意義であった。
- ・民間と取り組みが異なる違和感。

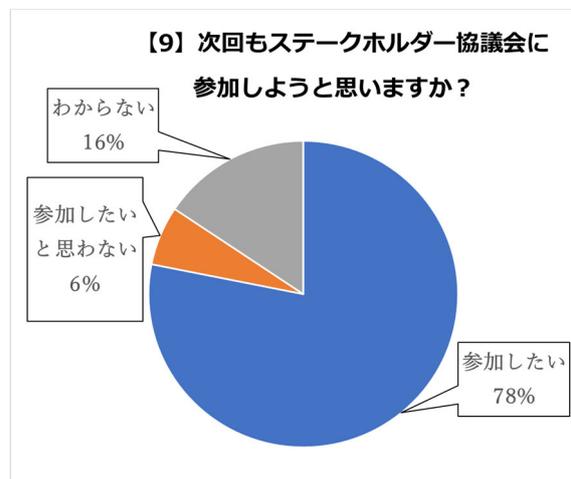
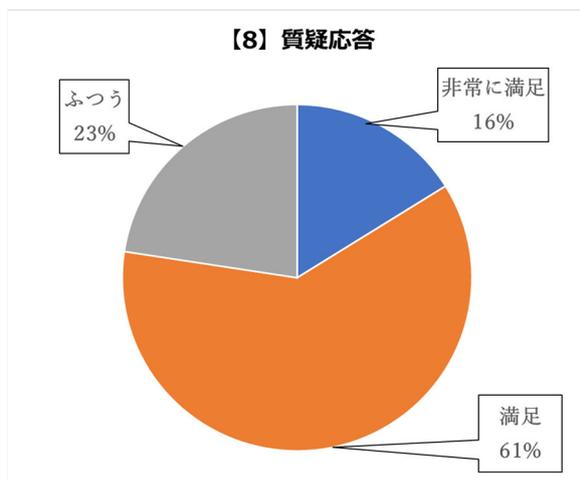


【6】分科会

- ・ダイバーシティについて個人の意見はそれぞれだが、進めていくという共通した意見にまとまった。
- ・目標をさらに明確化させる必要がある。
- ・いろいろな意見が聞けた。
- ・大学・企業の皆様と直接お話しすることができて良かった。
- ・75分は少し長い。60分にして、そこですくいとれなかった意見を全大会で発表してもらってはどうか。
- ・ステークホルダーの方の意見をもっといただけるとよかった。学内者が多かった。
- ・現状理解できた。できれば資料を事前にいただくと準備学習ができ、意見としてより反映できる。
- ・産学連携の貴学の課題や今後の対策を知ることができ、有意義であった。
- ・議論の目的や方向性が不明なまま何が求められているかが見えなかった。
- ・少人数なので発言しやすかった。（ほか同意見1名）
- ・分科会の選択時、項目の題名だけだと難しくがわかりづらい。内容が少しわかると決めやすい。

【7】配付資料

- ・もう少しトピック的な内容が欲しかった。
- ・オンラインで参加したが、対面参加で配付されたスライド資料が手元になかったので、配付してほしい。



【10】 その他アンケートで頂いた御意見等

【教育カテゴリー】

- ① ボラさぼで実際に活動した学生の、生の声を聞きたかった。
「防災・復興人材特別プログラム」を学び、学生が自身の将来に繋げて考える機会となればよい。
- ② 金沢大学でリスキリングやリカレント教育を行っているという情報がつかみにくいので、わかりやすくするとよい。
また、社会人は何をリスキリングしたいのか、どのように把握されているのか。

⇒ 金沢大学の回答

- ① 令和6年4月21日、7月21日開催の「令和6年能登半島地震調査・支援活動報告会」にて、学生による報告の場を設けてきました。ご意見を参考に、今後も学生の声を届ける機会を検討していきたいと考えます。
また、「防災・復興人材特別プログラム」では、災害、復旧・復興、防災・減災に関する科学的知見の学修により身につけた科学的、倫理的及び実証的な力をもって、被災地の復旧・復興に貢献し、広く我が国や世界の防災・減災に活躍できる高度人材の育成を目指しています。
- ② 本学 Web サイトが分かりやすくなるように検討します。
産学連携協会、北陸未来共創フォーラムの所属企業等に対してアンケートの実施、本学と連携している企業・自治体等からの要望等を通してニーズを把握し、リスキリングプログラムを構成しています。

【研究・社会共創カテゴリー】

- ① 「未来知」を作り出す文理医融合のあり方を、たくさんの具体例を通してもっと知りたい。
- ② 「大学をよくするため」という面を強調しすぎず、大学がよくなることで社会へどんな好影響（効果）があるか明確に示す必要がある。
- ③ 企業にとっても高額な研究費はハードルが高いため、企業に寄り添う姿勢で、アドバイスレベルのものに対しても対応いただくことから、大きな案件に繋がる可能性があると思う。
- ④ “雑談のチカラ”の場を地域に設定してほしい。

⇒ 金沢大学の回答

- ① 令和5年4月に実証研究の中核となる「未来知実証センター」を設置し、未来知で実現したい未来社会を描く「ショーケース」（研究テーマ）をこれまでの累計で18件展開しております。令和6年8月27日には、石川県地場産業振興センター本館大ホールにおいて「未来知実証センター テイク オフ イベント」を開催し、15のショーケースをご紹介します。今後も社会の皆さまに広く知っていただき、未来の価値をつくる大学として、一層の産学官金連携を図っていきたくと考えています。
また、文理医融合については、新学術創成研究機構、サピエンス進化医学研究センター、先端観光科学研究所などを展開しております。今後、J-PEAKS 事業により文理医融合を

より一層推進し、世界的にもユニークな研究モデルの構築を目指していきます。この取り組みを通じて、若手研究者の育成や、産学官金連携による新たなイノベーションの創出に繋げて参ります。

具体的な事例については、下記 Web サイトをご参照願います。

<未来知実証センターWeb サイト>

<https://miraichi.w3.kanazawa-u.ac.jp/>

<新学術創成研究機構>

<https://infiniti.adm.kanazawa-u.ac.jp/>

<サピエンス進化医学研究センター>

<https://square.umin.ac.jp/top/sapiens/>

<先端観光科学研究所>

<https://tabi-sciences.w3.kanazawa-u.ac.jp/>

② 研究面及び社会共創の面では、以下のとおり社会への貢献ができると考えます。

1. 技術革新と経済成長への貢献

大学は新しい技術や知識を生み出し、産業界と連携してイノベーションを起こします。これにより、新しい産業が生まれ、雇用が創出され、地域経済や国全体の成長に寄与します。

2. 地域活性化と社会貢献

大学は地域課題を解決する拠点としても機能します。地域産業との連携、医療・福祉分野での研究成果の応用、地域文化の発展支援など、多様な形で地域社会に貢献します。

③ 本学では、令和3年度より、企業様の依頼内容に応じて教職員等が学術上の課題解決等について専門的な知識に基づき助言等を行う「学術コンサルティング」の制度を設けています。本制度により、事業化までの様々なステージの課題解決に柔軟に対応しています。

その他、本学との研究・開発の推進など産学連携に関する問い合わせ先として「ワンストップサービス窓口」も開設していますので、お気軽にご相談ください。

<各制度のご案内（リーフレット）>

<https://o-fsi.w3.kanazawa-u.ac.jp/company/cooperation/>



④ 本学の学生・教職員と地域の人々との気軽な雑談の場を創出する交流事業として、「雑談のチカラ」を実施しています。令和6年度も金沢市の若手職員と本学学生との「雑談のチカラ」を実施しています。ご要望等ございましたら、

問い合わせフォームからお気軽にお問い合わせください。

<雑談のチカラ Web サイト>

<https://co-creation.w3.kanazawa-u.ac.jp/zatsudan/>



【その他御意見】

- ・学長のプレゼンテーションでは、金沢大学がどのように地域に貢献（特に震災についての役割）しているのかをはじめ、何を目指しているのかといったビジョンが明確に伝わってきて大変魅力を感じた。
- ・金沢大学の現状と課題、その解決策を幅広く知ることができ勉強になる。ぜひこの協議会を継続してほしい。
- ・大きな部屋に二つの分科会をするのは次回からは改善の余地あり。相互の声が議論を妨げる。分科会の目的については、事前に周知の必要がある。
- ・駐車場から会場がもう少し近いとよい。
- ・能登の応援、ありがとうございます。学生の経験は卒業後にも、各地で生きてくると思う。困っている人を助ける気持ち、それが大事だと思う。
- ・防災のことを学ぶ研究学科ができるということで、避難所にさえ行けない老人や障がい者などの弱者になりえる人にも、目を向け、そこにこそ関係をつくる研究であってほしいと思った。障害をもつ子を育てる親として、わが学校も参加し協力していけたらと思う。

多くの貴重な御意見をありがとうございました。

～昨年度のアンケート御意見を踏まえ、R6年度は以下のとおり対応しました。～

【ステークホルダー協議会】

〈開催時期〉 学生は授業時間外が参加しやすい ⇒ 金大祭前日の授業がない日で実施

〈分科会〉 分科会の時間がもう少しほしい ⇒ 60分から75分に変更
他の方の発言が聞こえづらい ⇒ 会場を変更。全グループではないが、
個室でディスカッションできるよう配慮

【広報グッズ】 今後希望するグッズとして、ロゴがデザインされたマグネットの要望あり

⇒ 試作品を製作。好評であったため今後製品化を検討中



発行・編集 金沢大学総務部総務課
〒920-1192 石川県金沢市角間町
電話 076-264-5111